

看護系大学生における歯科保健行動の認識と実態

宮崎 珠美¹・池田 映里²・國武 美彩³・川口 聡太⁴
高藤 真衣⁵・納富 実梨⁶・黒田 裕美⁷・浜崎 美和⁷
三浦 沙織⁷・山田絵理佳⁷・松浦 江美⁷

要 旨

目的：口腔内の衛生状態を保つためには、毎日の歯科保健行動が必須である。今回、1. 看護系大学生における歯磨きの認識と実態を明らかにすること、2. 歯科保健行動実施の有無で比較を行い、効果的な口腔ケアのための看護の示唆を得ることを目的とした。

対象と方法：対象は、A大学看護系大学1～4年次に所属する男女学生229名とした。先行研究を参考に対象者の属性、口腔内の健康状態、歯科の定期健診の受診状況、歯磨き習慣、ブラッシング行動スキル、生活習慣について無記名自記式質問紙を用いて調査した。

結果：1年以内に歯科の定期健診を受けている者は、本研究では67名（53.6%）と歯科保健行動の実施群・非実施群の比較では、歯周病の疑い、ブラッシング行動スキル、生活習慣に有意差は認められなかった。

結論：看護系大学生の「歯科の定期健診に関する認識」や歯磨きの頻度や時間などの「歯磨きの習慣」は、一般成人や医療福祉系の大学生とほぼ同程度であった。「歯周病の疑い」がある学生は14.6%であったことから、看護系大学生への歯科保健行動に対する働きかけが今後の歯周病予防への第一歩になると考える。

保健学研究 34 : 39-46, 2021

Key Words : 歯科保健行動, 歯周病, ブラッシング行動スキル, 生活習慣

(2020年8月17日受付)
(2020年11月5日受理)

I. はじめに

歯および口腔の健康は、単に食物を咀嚼するという点からだけでなく、食事や会話を楽しむなど、豊かな人生を送るための基礎となるものである¹⁾。虫歯や歯周病などを患うと、その発病、進行により歯の喪失に繋がり、後に全身の健康に影響を与える。つまり、歯や口腔の健康を保つことは全身の健康や生活の質（quality of life: QOL）の向上に重要であり、口腔内の衛生状態を保つためには毎日の歯磨きや歯科定期健診を受けるなどの歯科保健行動が必須である。しかし、厚生労働省の平成29年度患者調査の概況²⁾では、歯肉炎および歯周疾患の患者数は、469万2000人と3年前の調査³⁾より24万3000人以上増加している。歯周病の有病率²⁾は、60代は約9割、30～50代は約8割、20代は約7割であり、若い世代も多くの人が歯周病を発症していることが明らかとなっている。

学生は、高校生までう蝕予防を重視した学校歯科健康診断⁴⁾が行われ、学校から歯科受診を促すなどの個別指導が行われていた。しかし、大学生になると親元を離れ一人暮らしをする学生も多くなり、生活環境、食生活などにおいても大きな変化が生じてくる。そのため、う蝕が増加するだけでなく、歯周病につながる可能性があると考えられる。大学生の歯科保健に関しては、学生の健康白書⁵⁾にう蝕、歯周疾患、不正咬合の罹患率に関する実数とパーセンテージの結果が報告されているものの、2015年の調査では、全国の大学のうち2大学（6279人）の結果しかまとめられていない。以上のように、大学生は、高校生までと異なり学校保健安全法にて学校歯科健康診断は義務付けられていないこともあり、大学生のみに着目した口腔内の状況や歯科保健に対する意識や現状についての報告^{4,5)}は少ない現状である。厚生労働省による平成28年度の歯科疾患実態調査⁶⁾では、歯肉出血を

- 1 国立病院機構嬉野医療センター
- 2 大阪医科大学附属病院
- 3 九州大学病院
- 4 長崎大学病院
- 5 熊本大学病院
- 6 飯塚病院
- 7 長崎大学医歯薬学総合研究科

有する者の割合は、15歳以上の年齢階級で30%を超え、30歳以上55歳未満で40%を超えていると報告されている。平成30年度国民健康・栄養調査⁷⁾によると歯肉に炎症を有すると回答した者は20～29歳では21.1%であった。また、医療福祉系の大学生に対する口腔内健康状態に関する土屋らの研究⁸⁾では、「1年以内の歯科定期健診あり」、「1日2回以上の歯磨きをする」、「就寝前に歯を磨く」の3つをすべて満たす歯科保健行動ありとされる人の割合は22.5%であった。これらの歯科保健行動の中でも、歯科定期健診の受診率は男性28.9%、女性35.8%と低く、受診しない理由は、「面倒くさい」、「時間が無い」、「お金がかかる」、「必要性を感じない」と報告⁸⁾されており、大学生の歯科保健行動に対する意識は高いとはいえない。

看護系大学生は、講義や演習、実習などで歯科保健行動について学ぶ機会が多い。近年、口腔ケアの重要性はますます認識されるようになっており、周手術期や慢性疾患など様々な患者を対象とした口腔ケアが行われるようになってきた。日本看護協会⁹⁾では2006年より摂食・嚥下障害看護の認定看護師の制度が開始され、その教育課程の中に口腔ケアが含まれている。このように、看護系大学生は口腔ケアについて学ぶ機会が多いことから、自分自身の口腔ケアに対する認識やその実態は一般成人や医療福祉系の大学生より認識が高く、歯科保健行動がとれていることが推測される。看護系大学生の歯科保健行動の認識や実態を把握することは、成人歯科保健における歯・歯周病対策への示唆を得ることに繋がると考える。

II. 目的

本研究の目的は、1. 看護系大学生における歯科保健行動を明らかにすること、2. 歯科保健行動実施群、非実施群の比較を行い、成人歯科保健における歯・歯周病対策への示唆を得ることを目的とした。

III. 方法

1. 研究期間：2019年7月24日～2019年12月31日
2. 対象：A大学看護系大学1～4年次に所属する男女学生229名
本研究は、長崎大学大学院医歯薬学総合研究科（保健学系）倫理委員会の許可を得ており、全ての対象者に研究内容を説明し、無記名自記式質問紙調査票の回答をもって同意とみなした（許可番号：19061308）。
3. 調査項目：無記名自記式質問紙調査票を用いて以下の項目を調査した。
 - 1) 対象者の属性：性別、年齢、一人暮らしか否か。
 - 2) 口腔内の健康状態：
 - (1) 口腔内の状況について：日本臨床歯周病学会の歯周病のセルフチェック項目¹⁰⁾をもとに「朝起きたとき、口の中がネバネバする」、「ブラッシング時に

出血する」、「口臭が気になる」、「歯肉がむずがゆい、痛い」などの10項目について「あり」、「なし」で調査した。「歯肉が赤く腫れている」、「ブラッシング時に出血する」のいずれかがあった者を「歯周病の疑い」あり群とした。

- (2) 口の乾燥の有無について：「いつもある」、「時々ある」、「あまりない」、「全くない」の4段階のリカートスケールを使用した。
 - (3) その他：歯科治療の有無について
- 3) 歯科の定期健診の受診状況：
 - (1) 国民健康・栄養調査⁷⁾の項目を参考に1年以内の定期健診受診の有無を調査した。
 - (2) 定期健診未受診の理由について：国民生活基礎調査¹¹⁾の質問項目や土屋らの研究⁸⁾を参考に「お金がかかる」、「時間が無い」、「面倒くさい」、「必要性を感じない」、「かかりつけ医がいない」、「歯に定期健診があることを知らない」、「歯医者が嫌いだから」、「その他」の8項目について「あり」、「なし」で調査した。
 - (3) 定期健診受診に向けた対策について：先行研究⁹⁻¹⁶⁾を参考に、定期健診未受診者に対して、「大学で定期健診を実施する」、「無料で診察」、「病院の紹介がある」、「定期健診のハガキがある」、「定期健診の重要性に関する講義」、「土日、夜間の営業がある」、「その他」の7項目について「あり」、「なし」で調査した。
 - 4) 歯磨き習慣について：歯磨き時間、歯磨き回数、歯磨きを行うタイミング、歯磨きに使用する道具（手用歯ブラシ、電動歯ブラシ、デンタルフロス、歯間ブラシ）について調査した。
 - 5) ブラッシング行動スキル：山本ら²⁰⁾のブラッシング行動スキル尺度を使用した。なお、尺度の使用に関しては、尺度開発者に使用の許可を得た。同尺度は、児童のブラッシング行動に関する自己管理スキルの一部を評価するために作成された尺度であるが、大学生のブラッシング行動の尺度としても信頼性も検証されている²⁰⁾。
尺度の項目は、①今日ぐらいいは磨かなくてもいいやと思った時でも考え直して磨く、②イライラしたりクヨクヨしている時も歯を磨くなど8項目で構成されており、「いつもできている」4点、「大体できている」3点、「ほとんどできていない」2点、「全くできていない」1点の配点となっている。得点が高いほど個人のブラッシング行動がとれていることを示す。
 - 6) 生活習慣について：夜何かを食べて歯を磨かずに寝ることがあるか、間食の有無、普段ガムを噛むか、甘味を食べる習慣やカフェイン摂取の有無、飲酒・喫煙の有無、自覚しているストレスの程度を調査した。ストレスの程度は、Visual analog scaleを用いた。

4. 解析方法

歯科保健行動の有無については、1年以内の「歯科定期健診あり」、う蝕予防に効果があるとされている「1日2回以上歯磨きをする」「就寝前に歯を磨く」の3項目全てを満たしている者を「歯科保健行動実施群」とし、上記の項目を満たさない者を「歯科保健行動非実施群」とし、2群間で口腔内健康状態と生活習慣を比較した。

分析は、変数毎の記述統計を行った。データの表記方法は、平均値と標準偏差、中央値と四分位範囲、件数・割合とした。また、正規性の検定を行い、正規分布を認めなかった場合は、相関分析はSpearmanの相関係数、2群間の比較はMann-WhitneyのU検定、歯科保健行動実施群・非実施群と歯周病疑いのあり群・なし群の比較にはカイ二乗検定を用いた。なお、統計解析ソフトは、SPSS25.0 J for windowsを使用し、有意水準を5%とした。

IV. 結果

質問紙の配布数は229名で、回収数は123名（回収率53.7%）であった。対象者の内訳は、男性9名（7.3%）、女性114名（92.7%）、平均年齢は、20.6±2.2歳、1人暮らしの学生は70名（56%）であった。

1. 対象者の特性

1年以内に歯科の定期健診を受けている者は、67名（53.6%）であった。

歯磨きの時間は、3～5分（71名、57.7%）が最多であった。歯磨きの回数は、2回/日（71名、57.7%）、歯磨きのタイミングは、朝食後に歯を磨くと返答した学生は96名（78.0%）と最も多く、昼食後に歯を磨くと返答

した学生は47名（38.2%）であった。また、歯磨きに用いる道具は手用歯ブラシが最も多く（120名、97.6%）、デンタルフロス23名（18.7%）、歯間ブラシ17名（13.8%）、音波歯ブラシ1名（0.8%）であった（表1）。

歯科の定期健診を受けない理由（図1）は、「面倒くさい」、「時間がない」25名（48.1%）、「お金がかかる」20名（38.5%）であった。どんな取り組みがあれば定期健診を受けようと思うかという質問では、「大学で定期健診を実施する」30名（56.6%）、「無料で診察」23名（43.4%）であった。

2. 歯科保健行動とその他関連要因の比較について

「1年以内の歯科定期健診あり」、「1日2回以上の歯磨きをする」、「就寝前に歯を磨く」の3つをすべて満たす歯科保健行動を実施している学生は、44名（35.8%）であった。また、「現在、歯科治療」を行っている学生は、歯科保健行動実施群の方が非実施群より有意に人数が多かった（ $p=0.036$ ）（表2）。

歯周病学会のセルフチェック項目については、「特に症状なし」が51名（41.5%）と最も多く、「朝起きた時、口の中がネバネバする」32名（26.0%）、「口臭が気になる」29名（23.6%）、「前歯が出っ歯になった、歯と歯の間に隙間が出てきた食物が挟まる」20名（16.2%）であった（表3）。歯周病の疑いがあるものは20名（14.6%）であり、そのうち1名は「歯肉が赤く腫れている」、「ブラッシング時に出血する」の両方満たしていた（表2、3）。しかし、歯科保健行動実施群・非実施群と歯周病疑いのあり群・なし群、ブラッシング行動スキル、「間食をする」、「甘いものを食べる」、「キシリトールガムを噛む」

表1. 対象者の特性

項目	
歯科の定期健診	あり 67 (53.6)
現在歯科治療	あり 33 (14.4)
歯磨き習慣	
歯磨きの時間	
3分未満 / 3～5分 / 5～10分 / 10分以上 / 未記入	31 / 71 / 17 / 3 / 1 (25.2 / 57.7 / 13.8 / 2.4 / 0.8)
歯磨きの回数	
1回 / 2回 / 3回以上 / 未記入	4 / 71 / 47 / 1 (3.3 / 57.7 / 38.2 / 0.8)
歯磨きのタイミング	
起床後 / 朝食後 / 昼食後 / 夕食後 / 就寝前	50 / 96 / 47 / 51 / 82 (40.7 / 78.0 / 38.2 / 41.5 / 66.7)
使用する道具（複数回答可）	
手用歯ブラシ / 電動ブラシ / デンタルフロス / 歯間ブラシ	120 / 8 / 23 / 17 (97.0 / 6.0 / 18.7 / 13.0)
口腔内の乾燥	
いつもある / 時々ある / あまりない / 全くない	14 / 34 / 47 / 28 (11.4 / 27.6 / 38.2 / 22.8)
歯周病のセルフチェック総数	1.0 [0.0-1.0]
ブラッシング行動得点	23.0 [21.0-26.0]
感じているストレスの程度	62.0 [37.0-76.0]

・対象者数 (%)
・中央値 [四分位範囲]

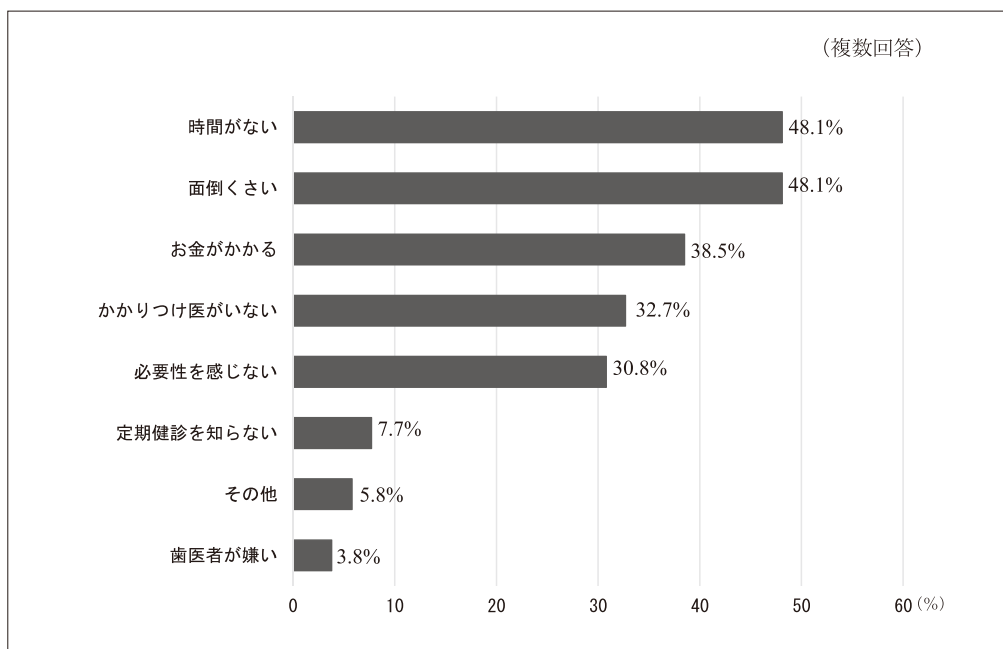


図1. 歯科の定期健診を受けない理由

などの生活習慣との間に有意差は認められなかった (表2).

ブラッシング行動スキル尺度の中央値は、23.0点であり、23点以下の低得点群は62名、24点以上の高得点群は61名であった。

歯周病セルフチェック合計数と歯磨きの時間 ($r=$

$-0.195, p=0.032$), 感じているストレスの程度 ($r=0.256, p=0.004$), 口の乾燥 ($r=-0.190, p=0.036$) の間に有意な相関が認められた。しかし、ブラッシング行動スキル得点と歯周病セルフチェック合計数には、有意な相関は認められなかった ($r=-0.162, p=0.074$)。

表2. 歯科保健行動とその関連要因

項目	歯科保健行動実施群 ^{a)} n=44	歯科保健行動非実施群 ^{a)} n=79	p値
現在、歯科治療			
あり	16 (36.4)	17 (21.5)	0.036
なし	28 (63.6)	62 (78.5)	
歯周病の疑い			
あり ^{b)}	5 (11)	15 (18)	n.s
なし	39 (89)	64 (82)	
ブラッシング行動スキル	23.5 [20.0-25.0]	23.0 [21.0-26.0]	n.s
生活習慣			
間食をする	2.0 [2.0-2.0]	2.0 [1.0-2.0]	n.s
甘いものを食べる	2.0 [1.0-2.0]	1.0 [1.0-2.0]	n.s
キシリトールガムを噛む	2.0 [1.0-3.0]	2.0 [1.0-3.0]	n.s
歯間ブラシを使って磨く	3.0 [2.0-4.0]	3.0 [2.0-3.0]	n.s
夜何かを食べて歯を磨かずに寝ることがある	3.0 [2.0-4.0]	3.0 [2.0-4.0]	n.s
口の乾燥	3.0 [2.0-4.0]	3.0 [2.0-3.0]	n.s

・対象者数 (%)
・中央値 [四分位範囲]

^{a)} 歯科保健行動実施群：「1年以内の歯科定期健診あり」「1日2回以上歯みがきをする」「就寝前に歯を磨く」をすべて満たしているもの
歯科保健行動非実施群：上記項目のうちいずれか、またはすべてを満たしていないもの

^{b)} 歯周病：歯周病学会のセルフチェック項目で「歯肉が赤く腫れている」「ブラッシング時に出血する」のいずれかがあったもの

表3. 歯周病学会のセルフチェック項目

項目	(複数回答)
1. 朝起きた時、口の中がネバネバする	32 (26.0)
2. ブラッシング時に出血する	15 (12.2)
3. 口臭が気になる	29 (23.6)
4. 歯肉がむずがゆい、痛い	1 (1.0)
5. かたい物が噛みにくい	3 (2.4)
6. 歯が長くなったような気がする	1 (1.0)
7. 歯肉が赤く腫れている (健康的な歯肉はピンク色で引き締まっている)	6 (4.9)
8. 前歯が出っ歯になったり、歯と歯の間に隙間が出てきた食物が挟まる	20 (16.2)
9. その他	3 (2.4)
10. 特になし	51 (41.5)

・対象者数 (%)

V. 考察

1. 看護系大学生における歯磨きの認識と実態について

今回、1年以内に歯科の定期健診を受けている者は67名(53.6%)であった。平成30年度の国民健康・栄養調査⁷⁾によると20歳以上で過去1年間に歯科健診を受けた者の割合は、52.9%であり今回の結果と同様であった。歯科の定期健診を受けない理由としては、「面倒くさい」、「時間がない」48.1%、「お金がかかる」38.5%が最も高かった。学生は、小学校から高校まではう蝕予防を重視した定期健診の実施や口腔衛生指導を受け、大学の講義や演習、実習などでも歯科保健行動について学ぶ機会が多いにも関わらず、看護系大学生という背景が歯科の定期健診を受けることへの影響は特になかった。

歯磨きの回数は1日2回71名(57.7%)が一番多く、歯科疾患実態調査⁶⁾の結果49.8%よりも多かった。森下ら²²⁾は、歯学部生のブラッシング習慣として96%が朝と夜の1日2回で、1回のブラッシング時間は278.2秒であったと報告している。今回、歯磨きの時間は3～5分が71名(57.7%)と最も多かったものの、昼食後に歯を磨くと返答した学生は26名(21%)少ないことから、昼休みに歯磨きをするという習慣が少ないことが考えられる。また、デンタルフロスを使用している者は18.7%、歯間ブラシを使用している者は13.0%であり、歯科疾患実態調査⁶⁾ 20～24歳の一般女性でデンタルフロスや歯間ブラシを用いた歯間部清掃を行っている者の割合22.9%より低い傾向であった。

2. 歯科保健行動とその他関連要因について

「1年以内の歯科定期健診あり」、「1日2回以上の歯磨きをする」、「就寝前に歯を磨く」の3つをすべて満たす歯科保健行動を実施している学生は44名(35.8%)で、土屋ら⁸⁾報告にある医療福祉系の大学生の歯科保健行動を実施している割合22.5%より高かった。本対象者は、授業や実習などで歯科保健行動の重要性を学ぶ機会が多いため、歯科保健行動への理解が高く歯科保健行動の実施に繋がったのではないかと考える。しかし、今回

の調査では学年や講義や演習、実習で学んだ具体的な歯科保健行動に関する内容を調査しておらず、口腔ケア、口腔ケアに関する学びや実習での経験が歯科保健行動に影響しているか、学年別の差については明らかにすることができなかった。

また、感じているストレスの程度が高い人ほど歯周病のセルフチェック総数が多いという結果は、下田平ら²³⁾が述べているようにストレスは免疫力の低下をもたらし、齲歯や歯周病の進行、再発に影響すると考えられる。

3. 歯科保健行動実施群、非実施群の比較について

今回、ブラッシング行動スキル得点と歯周病セルフチェック総数には有意な相関が認められなかった。また、歯科保健行動実施群・非実施群の比較においても、ブラッシング行動スキル、歯磨き習慣の変数との間に有意差は認められなかった。歯周病とは⁶⁾、歯垢(プラーク)の中の細菌によって歯肉に炎症を引き起こし取り除かなければ硬くなり、歯石と言われる物質に変化し歯の表面に強固に付着する。これはブラッシングだけでは取り除くことができず、この歯石の中や周りに更に細菌が入り込み、歯周病を進行させる毒素を出し続ける。今回、「歯肉が赤く腫れている」、「ブラッシング時に出血する」のいずれかがあった「歯周病の疑い」がある学生は20名(14.6%)であった。平成30年度の国民健康・栄養調査報告⁷⁾によると20～29歳で「歯周病の疑い」がある者の割合は21.1%と報告されている。また、歯科疾患実態調査の報告⁶⁾では、「歯ぐきが痛い、はれている、出血がある」と回答した者の割合は、15歳以上24歳未満で4.6%、25歳以上34歳未満で13.8%と高校生から大学生の年齢階級では比較的少ないが、その後の年齢階級で上昇傾向にあることが明らかとなっている。このように、年齢を重ねるにつれ歯周病のリスクが高まるため、大学生である20代から口腔内を身体の一部として意識していきけるようにすることが歯周病のリスクを減らすためにも必要だと考える。

4. 看護への示唆

看護系大学生は、講義や演習、実習の中で口腔ケアについて学ぶ機会が多いことから、著者らは、自分自身の口腔ケアに対する認識やその実態は一般成人や医療福祉系の大学生より認識が高く、歯科保健行動がとれていることを推測していた。

今回の研究において「歯科の定期健診に関する認識」や歯磨きの頻度や時間などの「歯磨きの習慣」は、一般成人や医療福祉系の大学生とほぼ同程度であった。一方、本研究の対象者は、3年次の講義や臨地実習の中で歯科衛生士が行う口腔ケアの方法を学び、見学する機会があるものの、歯ブラシ以外のデンタルフロスや歯間ブラシなどを使用については、一般成人女性よりデンタルフロスや歯間ブラシを用いた歯間部清掃を行っている割合が低い結果であった。

大学生になると親元を離れ一人暮らしをする学生も多くなり、生活環境、食生活などにおいても大きな変化が生じてくる。また、大学は、小学生から高校までのう蝕予防を中心とした定期健診の実施や歯科保健対策が義務ではないことから歯科の定期受診や予防行動が低下することが考えられる。大学生の歯科保健行動を促す対策として、まずお昼に歯磨きをしていない学生が多いことに着目し、大学内で歯磨きを行うための環境改善を行うことも必要かと考える。しかし、環境の改善を行うことは費用がかかり短期の改善策とはならないため、大学構内に歯と口の健康習慣のポスターの掲示、歯科保健に関するリーフレットを配布するなどの情報提供を行っていくことも必要だと考える。本研究においても「歯周病の疑い」がある学生は14.6%であった。大学生への歯科保健行動に対する働きかけが今後の歯周病予防への第一歩になると考える。

5. 研究の限界と今後の課題

本研究は自記式質問紙調査であるため、本人が自覚していない症状や生活習慣の自覚のずれがある可能性がある。また、歯科保健行動実施群・非実施群で各項目を検討するには、対象者が少なかったこと、今回の調査では学年や講義や演習、実習で学んだ具体的な歯科保健行動に関する内容を調査していなかったことから看護系大学生の特徴を明らかにすることができなかった。今後は、対象者数をさらに増やし、学習深度に応じた歯科保健行動に関する変数を追加していくことが必要と考える。

VI. おわりに

本研究では、「歯科の定期健診に関する認識」や歯磨きの頻度や時間などの「歯磨きの習慣」は、一般成人や医療福祉系の大学生とほぼ同程度であった。「歯周病の疑い」がある学生は14.6%であったことから、大学生への歯科保健行動に対する働きかけが今後の歯周病予防への第一歩になると考える。

VII. 参考文献

- 1) 厚生労働省：健康日本21「歯の健康」。厚生労働省、https://www.mhlw.go.jp/www1/topics/kenko21_11/b6.html#A61（2020年2月22日アクセス）
- 2) 厚生労働省：平成29年患者調査の概況。厚生労働省、<https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/kanja/17/index.html>（2020年2月22日アクセス）
- 3) 厚生労働省：平成26年患者調査の概況。厚生労働省、<https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/kanja/14/index.html>（2020年2月22日アクセス）
- 4) 文部科学省：学校保健安全法施行規定。文部科学省、https://elaws.e-gov.go.jp/search/elawsSearch/elaws_search/lsg0500/detail?lawId=333M50000080018#180（2020年9月14日アクセス）
- 5) 一般社団法人国立大学法人保健管理施設協議会：学生の健康白書、p.66-67, 2015.
- 6) 厚生労働省：平成28年歯科疾患実態調査 別途結果の概要。厚生労働省、<https://www.mhlw.go.jp/toukei/list/dl/62-28-02.pdf>（2020年9月14日アクセス）
- 7) 厚生労働省：平成30年国民健康・栄養調査結果の概要、第5章 歯・口腔の健康に関する状況、https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kenkou_iryuu/kenkou/eiyuu/h30-houkoku_00001.html（2020年9月14日アクセス）
- 8) 土屋はるみ, 山下晏佳里, 成瀬美里, 片瀬早紀, 小川晴加, 神庭海優, 小西未希, 富田早苗, 西田洋子：大学生における口腔内健康状態と歯科保健行動の課題。川崎医療福祉学会誌, 27: 51-61, 2017.
- 9) 日本看護協会：資格認定制度, 認定看護師,<https://nintei.nurse.or.jp/nursing/qualification/cn>（2020年3月11日アクセス）
- 10) 日本臨床歯周病学会：歯周病のセルフチェック,<http://www.jacp.net/period/about/>（2020年3月11日アクセス）
- 11) 厚生労働省：平成28年国民生活基礎調査 結果の概要Ⅲ世帯員の健康状況。厚生労働省、<https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa16/index.html>（2020年3月11日アクセス）
- 12) 古川絵里華, 糠谷敬子, 大澤 功：大学生における口腔健康に関する意識。東海学校保健研究, 37: 19-27, 2013.
- 13) 古田美智子, 江國大輔, 入江浩一郎, 小山玲子, 三部俊博, 山中玲子, アクターラヘナ, 山本龍生, 馬越通弘, 柏山健太, 森田 学：大学生の口腔健康状態の調査および歯周健康状態と関連要因の検討。口腔衛生学会雑誌, 59: 165-172, 2009.
- 14) 大里 愛, 大久保和美, 阿部雅修, 松田悠平, 吉増秀實, 柳元伸太郎, 山本一彦：東京大学における多国籍の学生を対象にした口腔衛生関連調査. CAMPUS

- HEALTH, 52 : 185-187, 2015.
- 15) 酒卷裕之, 麻賀多美代, 麻生智子, 大川由一, 保坂誠, 吉田直美, 島田美恵子, 榎本輝樹, 鈴鹿祐子, 日下和代 : 2009年と2012年の航空健診による大学生の口腔健康状態の変化に関する検討. CAMPUS HEALTH, 51 : 175-180, 2014.
 - 16) 小林莉子, 吉岡昌美, 松山美和, 日野出大輔 : 大学歯学部生における口腔健康状態に対する意識および歯科保健行動. 四国公衆衛生学会雑誌, 61 : 81-85, 2016.
 - 17) 本間多恵, 隅田百登子, 市川順子 : カリエスフリー者の歯科保健行動に関する検討 一般大学生, 本学学生およびそれらの保護者を対象とした調査研究. 日本歯科大学東京短期大学雑誌, 4 : 1-8, 2014.
 - 18) 大木明子, 松崎雅子, 大橋克己, 門田千晶, 初野有人, 高戸 毅 : 大学新入学時の口腔健康状態に対する意識および歯科保健行動に関する検討. 口腔衛生学会雑誌, 59 : 553-561, 2009.
 - 19) 本多恭子, 佐藤文仁, 御田村相模, 長瀬江利, 臼井るり子, 田中生雄, 牧田弘樹, 土井田誠, 柴田敏行, 武田 純, 山本真由美 : 大学生における口腔の健康状態と生活習慣との関連について. 学校保健研究, 49 : 112-116, 2007.
 - 20) 山本未陶, 今里憲弘, 筒井昭仁, 増岡 隆 : 自己管理スキルを応用したブラッシング行動スキル尺度の開発. 口腔衛生学会雑誌, 59 : 51-57, 2009.
 - 21) 貴戸成美 : 大学生の歯科保健行動とブラッシング行動スキルとの関連性. 日本歯科大学東京短期大学雑誌, 2 : 57-64, 2012.
 - 22) 森下真行, 宮城昌治, 島津 篤 : 歯学部生のブラッシング習慣とプラークコントロールの状況. 口腔衛生会誌 48 : 277-284, 1998.
 - 23) 下田平貴子, 瀬戸口尚志, 町頭三保, 和泉雄一 : 精神的ストレスおよび自己効力感が歯周病の進行・再発に与える影響に関する臨床評価. 日本歯周病学会会誌, 48 : 174-181, 2006.

Dental health knowledge and practices among nursing university students

Tamami MIYAZAKI¹, Eri IKEDA², Miwa KUNITAKE³, Souta KAWAGUCHI⁴
Mai TAKAFUJI⁵, Minori NOUTOMI⁶, Hiromi KURODA⁷, Miwa HAMASAKI⁷
Saori MIURA⁷, Erika YAMADA⁷, Emi MATSUURA⁷

- 1 National Hospital Organization Ureshino Medical Center
- 2 Osaka Medical College Hospital
- 3 Kyushu University Hospital
- 4 Nagasaki University Hospital
- 5 Kumamoto University Hospital
- 6 Iizuka Hospital
- 7 Graduate School of Biomedical Sciences, Nagasaki University

Received 17 August 2020

Accepted 5 November 2020

Abstract

Aim : Daily dental health practices are essential in maintaining oral health. This study aimed to (1) clarify the knowledge and practices of tooth-brushing among nursing university students and (2) compare the differences between those that practiced dental health behavior and those that did not, in order to identify nursing suggestions necessary for effective oral care.

Subjects and Methods : The subjects were a total of 229 male and female nursing students of University A in their first to fourth years. By reference to a previous study, an anonymous self-administered questionnaire was used to investigate the subjects' basic characteristics, oral health status, whether they had regular dental health check-ups, their tooth-brushing practices, tooth-brushing techniques, and general lifestyle.

Results : Sixty seven (53.6%) subjects had a dental check-up within the past year. No statistically significant differences were found between those that practiced dental health behavior and those that did not with respect to gum disease, tooth-brushing techniques and lifestyle.

Conclusion: Nursing university students' "Awareness of regular dental examinations" and "habits of brushing teeth" such as frequency and time of brushing teeth were almost the same as those of general adults and university students of medical welfare. 14.6% of students had "suspicion of periodontal disease". Therefore, we believe that nursing university students to take dental health behavior will be the first step toward preventing periodontal disease in the future.

Health Science Research 34 : 39-46, 2021

Key words : Dental Health Behavior, Periodontal Disease, Brushing Behavior, Brushing Techniques, Lifestyle